

見方・考え方を働かせて課題解決できる生徒の育成 ～主体的・対話的で深い学びを通して～

四万十市立中村中学校
校内研修だより
NO. 4
2022.11.14

「実践研究協働校事業『授業研究会Ⅱ』」

11月9日に「『高知の授業の未来を創る』推進プロジェクト実践研究協働校事業」の授業研究会Ⅱ（理科）が、校内研としても位置付けられて

高知県教育課程推進専門官 齊藤一弥先生の講話より

(1)why? ゴールは何か? 能力の明確化

小3から中3まで各学年で身につけるべき科学的概念や考え方がある。小学校と中学校では扱う対象が違うが、科学的探究プロセスを遂行していくという面は共通しているので、学年が上がるごとにグレーディングしていくイメージを持つことが大切。

(2)what? 能力は内容の深い理解に支えられている

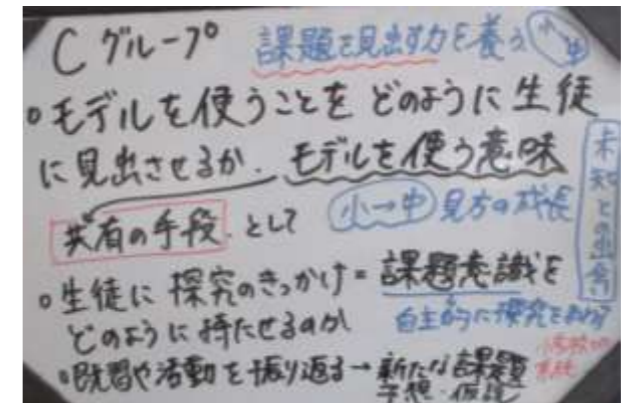
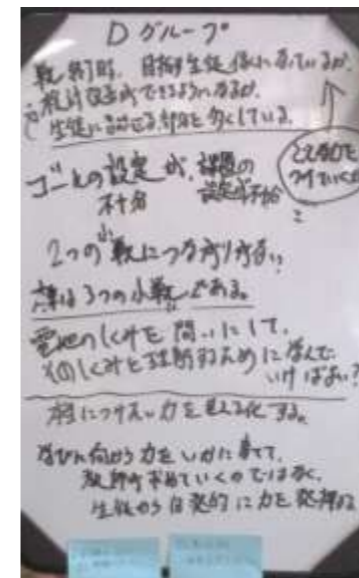
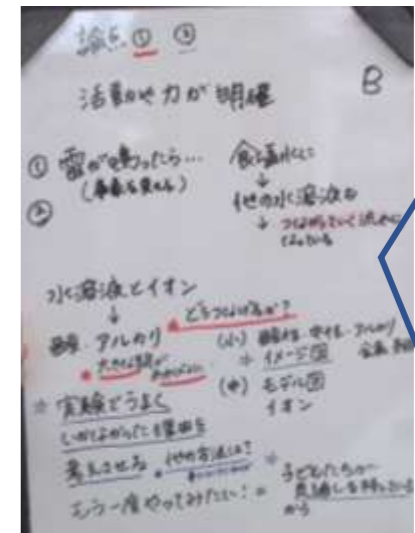
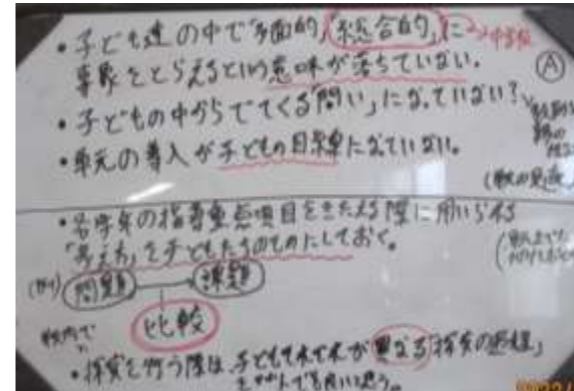
粒子を例に挙げるとその「存在」「結合」「保存性」「エネルギー」の4つの内容について扱う。まずは、それぞれの内容をどの学年で扱うのか確認する。そして、「気づきから課題を設定し仮説を立て、実験を観察したことから考察・推論し課題の再発見をする」という科学的探究プロセスを重視した学習活動を考えることで、思考の仕方を生徒が学んでいくと良い。特に、課題設定や仮説を立てる中で生徒の科学する心や追究する眼を育てていく。

(3)how? いかにか? 探究プロセスの桁を問う…R3年答申の意味と価値

「個別最適な学び」とは個の発想への対応であり、その充実が深い学びの実現へと繋がる。また、「協働的な学び」とは個の多様性の保障である。この2つは相互に関わり合っていく。問題に出会ったときは、まずは個別最適な学びをすすめ、その共有にはICTの活用が考えられる。その後協働的な学びを仕組み、結果の考察でそれぞれの考えを共有する。実験は成功しなくても良い。大事なのはなぜ実験が成功しなかったのかを確認し、学びの主体である生徒自身が自覚すること。そのことにより学びの再構築が行われる。

当日は11グループに分かれ、以下の視点で協議していただきました。
【協議の視点】

- 単元終了時の目指す生徒の姿になるような単元構想になっているか。
- ・生徒が自分たちで探究の過程をまわすことができるのか。
- ・生徒が自分たちで探究の過程をまわすためには、これまでにどんな力を身につけておかなければならないのか。



理科チームでは、生徒にいかにかに課題意識を
持つさせるかや小中の学びをいかに
協議されていきました。

